［市民公開講演］

特別講演Ⅱ

先見の人 佐野常民

福岡　博

佐野常民記念館名誉館長

近代化遺産と佐野常民

現在，ユネスコ総会で採択された「世界の文化遺産」の候補に幕末佐賀藩の歴史遺産がとりあげられ注目をあびている．

三好信浩著の『日本工業教育成立史の研究』には，佐野常民について「藩営の近代工業技術開発に先導的役割を果した佐賀藩には，すぐれた蘭学者や技術者が輩出した．（中略）佐賀藩の技術陣の中でもっとも教育家に近いと思われる人物を探るとすれば，精煉方技術陣の指導者であり，海軍学寮の生みの親である佐野常民の名前が浮かんでくる」とある．

また幕末，長崎海軍所の伝習生の一人であった勝麟太郎（海舟）が著した『海軍の歴史』の中に「佐賀は其君侯（鍋島直正）諸見卓越蚤（っ）とに蘭学大に開け，当時既に反射炉を設けあり，是蘭籍に就て建築する所幕府も依頼して大砲数門を鋳造せしむ，故に学士其人に乏しからず，伝習生の進退船舶の事，佐野栄寿左衛門（常民）頭領となり周旋す．故に列藩に冠し其熟習尤速かなりし」とある．これらから彼が時局を適確にとらえ，幅広い事業に積極的に取り組んだことがわかる．

その生い立ちと略歴

文政5年（1822）佐賀藩士下村充實（みつよし）の五男として誕生，9歳の時藩主鍋島斉直（なりなお）の侍医佐野常徴（つねみ）の養子となる．天保8年（1837）江戸にいた常徴のもとに出かけ，古賀侗庵の塾に入門，侗庵は幕府の儒官であったが西洋事情に詳しく「海防臆測」など著書がある．

天保10年斉直が江戸藩邸で死去したため，養父常徴と帰国，同13年山領真武の娘（養女）駒子と結婚，外科医を志す．

弘化3年（1846）藩主鍋島直正の命で，京都に遊学，広瀬元恭の時習堂に入門，蘭学を修業，二年後大坂の緒方洪庵の適塾に移る．同門には大村益次郎もいた．その後江戸に登り，伊東玄朴の象先堂に入り塾頭となる．ここでは医学のほか洋式技術に関する蘭書の翻訳など藩との応答があった．

嘉永4年（1851）長崎への遊学を命ぜられ，帰途，広瀬元恭の塾を訪れ，石黒寛次，中村奇輔，田中久重ら勧誘，佐賀藩に推せんする．同六年長崎から呼び戻され，精煉方の頭人（主任）に任命された．この段階で常民は医業をやめ，武士となる．

長崎伝習と佐賀藩海軍

安政2年（1855）幕府による長崎海軍伝習所が創設され，大規模の軍事科学技術の導入する教育機関として各藩からも伝習生が集った．その中最も多い48名を佐賀藩は派遣した．同藩では理化学研究の精煉方や兵学を主とする火術方の技術者の派遣だったので，他藩と比べると優れていたのである．

安政6年（1859）幕府は長崎での海軍伝習の中止を決定したので，佐賀藩は伝習を継続させるため，筑後川地先の三重津に海軍学寮を設置し，伝習帰りの者を教官として，海軍教育を展開，教官には中牟田倉之助，真木長義など数名が任命され，航海術，運用術，造船術など担当，佐野常民は総責任者として，伝習に力を入れ，軍艦も晨風丸，電流丸，飛雲丸も運用，艦上での実地訓練に力を入れた．また，慶応2年（1866）には，佐賀藩政及び軍制改革についての建白書を藩に提出，これを骨子とした海軍設立の建議書は明治2年（1969）藩主直正の名で明治政府に上呈された．幕末から維新と大きく変わって

いる中で佐野常民は技術教育に尽力したのである.

博覧会男としての活躍

佐野常民は慶応 3 年（1867）のパリ万国博覧会と明治 6 年（1873）のウィーン万国博覧会に洋行した. パリ博ではオランダに軍艦建造の発注などの任務もあり，西洋の機械文明を直接見聞するとともに，博覧会場にあった赤十字の展示館の見学は，後年明治 10 年の西南戦争の時，誕生させた「博愛社」へとつながることになる.

紙幅が限られていて，このほか常民の先見的なことはまだ数多くあることを申し上げて，筆を擱くことにする.